

難事件

A u t h e r フェイト・テスタロッサ・ハラオウン

それは二週間も前の事になる。

「フェイトちゃん」

「あ、なのは」

昼時も少し過ぎた頃、フェイトのデスクに一本の通信が入った。

フェイトは、少し前に抱えていた事件書類の整理がようやく終わり、遅めのランチをとろうと席をちようど離れるところだった。

それでもフェイトの日常はかなり忙しい身である。時空管理局執務官という立場でいくつかの事件を抱え解決に向けて日々働いていた。

通信の呼び出し音が聞こえると、フェイトは、何か予期せぬトラブルが発生し、やっと取れそうなランチが先延ばしになるのだと覚悟をきめてから通信に出たのだった。

しかし、意外にもモニターの向こう側には爽さわやかな笑顔があった。

その笑顔は、フェイトにとってどんなにお腹が空いていようとも、それを忘れてしまい

そうなら嬉しいものだ。

茶色のシワ一つ無い陸士部隊の制服に身を包んだ高町なのは、モニターの向こう側からにこやかに笑ってフェイトを見つめていた。

「あ、フェイトちゃん。忙しいところごめんね。これからお昼だった？」

「うん。大丈夫だよ」

フェイトが席を立ったまま通信に出たからであろう、勘のいい親友は、フェイトがこれからお昼を食べるために離席りせきしようとしていた事に気がついたようだった。

「どうしたの？なのは」

フェイトは話を聞くために再び席へと着く。

執務官になった今でもフェイトはなのはに会うと胸が高鳴った。それは彼女、なのはが、エースオブエース、誰もが認める無敵のエースと周囲から尊敬の眼差しで見られているからではない。

フェイトにとって、なのはは特別な存在だったからだ。

それは、もうかれこれ十年以上も前にできた絆と言えよう。フェイトはあの時のなのはの手のぬくもりを、一日たりとも忘れたことはなかった。そして、その絆となのはへの思いは年月を追う毎に強くなっていった。

「あのね。来週付けでスバルのいる防犯警備隊へ視察に行くことになったんだ。それをね

フエイトちゃんに早く知らせようと思って連絡したんだよ」

「ほんとに？」

フエイトは、すこしだけ嬉しくなって聞き返した。

「うん。戦技教導の基礎を防犯警備や災害対策にも生かせないかという、はやてちゃん達の意見があつてね、戦技教導プログラムを近いうちに作ることになるんだけど、そのための視察なんだ」

モニターの向こうにいるのは、航空戦技教導隊という時空管理局本局の武装隊で、本格的なシューティングアーツの指導をしている。その折り紙付の実力を買われたのであらう。

「フエイトちゃんも来週から担当する事件で、防犯警備隊に出入りすることになるんじゃない？」

「うん。詳しいことはまだ聞いていないけれど、こっちはティアナと一緒に行くんだよ」

「シャーリーはどうしたの？」

「残念ながら研修中でデバイス関連の研究所にいつてるよ。でもこの話をした時はとても嬉しそうにしていたから楽しんでるんじゃないかな」

「そっか。シャーリーには残念だけど、また機動六課みたいなメンバーになるね」

「うん。そうだね」

なのはは機動六課のメンバーと聞いて、ニコリと笑みをうかべた。

機動六課とは、JS事件を担当するために設立された部署で、フェイトもこの事件の際に出向扱いとなって所属していた部隊である。

現在、フェイトの直属の部下となったティアナ執務官補や、防犯警備隊に行ったスバル・ナカジマも機動六課でなのはの指導を受け、聖王のゆりかごと呼ばれる古代ベルカの戦艦がミッドチルダ上空を占拠した際、一緒に戦った仲間でもあった。

「ところで、なのは、体は大丈夫？」

「もうすっかり平気だよ」

「災害対策用の教導プログラムを監修することになるんだよね？」

「うん。たぶんそうなることになりそう」

「とても大変そうな仕事だし、なのははまだ魔力だって完全にはもどってないんだから
・・・」

「フェイトちゃん。そんなに心配しないで大丈夫だよ」

「なのはは、大切な友達だからね。心配にもなるよ」

「ありがとうフェイトちゃん」

「絶対に無理しちゃダメだよ」

「うん」

なのはは、一年半ほど前にあったJ S事件において多大な功績を納めた反面、そこでの無理がたたり、後遺症を抱えるまでになってしまった。事件終結してから二ヶ月以上も痛みを苦しんでおり、フェイトも看病にあたった。そんな状態の中、フェイトはなののはのこを正直見ていられなかったのだ。

現在は、なののはの様子もだいぶ落ち着いてきているが、フェイトはそんななののはがとても心配で心配でたまらなかった。

「大丈夫だよ」

しばらく二人はモニター越しに見つめ合っていたが、なのはが神妙な面持ちでもう一度フェイトに向かって言った。

「うん」

フェイトはなののはの言葉を信じて、頷くばかりだった。

「あ、フェイトちゃんも、そろそろお昼食べなきゃね。遅くなっちゃってごめんね」
なののはが申し訳なさそうに言う。

「ううん。仕事がおしたから、大丈夫だよ」

「そっか。それじゃあ、フェイトちゃん。防犯警備隊で」

「うん」

フェイトは、少し名残惜しかったが通信を切った。